

Title	トルコ絨氈考
Sub Title	
Author	内藤, 智秀(Naito, Chishu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.3 (1933. 8) ,p.85(463)- 107(485)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330800-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トルコ絨氈考

内藤智秀

歴史の動因となるものは精神的な素因と物質的な素因と、更に精神的物質的兩方面の力即ち文化的素因とに三分して見る事が出来る。其の精神的な素因も亦個人心理の力、社會心理の力更に民族心理の力と三分して見る事が出来る、その民族心理の力と云ふのは所謂國民性による力とも云ひ得るわけである。尙ほ物質的動因は内的外的の二つに別け、文化的動因は學藝、制度、經濟等に分けられる。

今其の中の歴史的動因としての國民性の方面を一寸のぞいて見ると、是れは色々の方面からうかゞふ事が出来るであらうが、回教諸國の場合に於ては其の近東文明の眞髓たる回教美術、就中絨氈に現はれたるデザイン又は色彩等によつても判断する事が出来ると考へる。

二

總じて文明には二つの形式があつて、其の一つは草原地帯のそれで他の一は森林地帯のそれである。草原地帯にあつては原始人達は遊牧を業としステップ地帯に於て水草を追うて轉々する。彼等は其の住宅及び家族は是れを財産として見る。即ち一定期間一定の場所に於て住居を定める時、家畜の番をするものは子供であり、家屋内の雜用に從事するものは家妻である。良人は食物を尋ねて狩りを爲し、家屋たる天幕の修繕を爲し、又衣服の材料を蒐集する。其の間附近に隣家の出来た場合は是れと談判して或は睦び或は争ふ。此所に家族制度又は社會が出来、其の發達の結果遂には部族又國家が成立する。

他方森林地帯に居住するものは偶々夫婦が出来て猛獸や毒蟲をさける爲めに樹木の上に家屋を造る。然し夫は其の妻に對する食事等を用意する爲めに狩獵に出掛けたとする。一ヶ月や二ヶ月の間は歸路を違へず歸宅するであらうが、三ヶ月四ヶ月と其れが度重るにつれて、遂には其の歸路を見失ふ事のあるのが常である。斯様にして彼等は互に他の相手を求めて新たな家庭を作る。そして子供があつた場合でも、其の子供と母とは不本意ながら同様にして別れ別れになり、子供が一人で成長する様になれば發育もしやうが然らざれば遂には死滅するものが多いわけである。斯様な地方には個人主義的な思想が發達して、社會も國家も其の成育を見る事が出來ず、隨つて文明の進歩は極めて稚々たるものがある。

即ち草原地方には古代東方諸國の文明を始め希臘羅馬の文明、乃至サラセン、印度、支那等の文明を見たわけであるが、他方森林地方たるアウストラリヤとかアフリカのフツシユメンの如きは遂に今日に至るまで殆んど進展を見ない。其中草原地方には一家庭に於て或は其の部族又國家内に於て權威を維持する爲めには其の家屋を飾る必要も生じて来る。即ち其の家屋なる天幕を次第に改善して行く。天幕は羊の毛又は駱駝の毛等を績いで、天然色のまゝ、何等の染色を施さずに作られた事を始めとするが、それが次第に改善されると、帝王の尊嚴を維持する爲め、又宮殿や都市を經營すると同様に玉座の敷物又は主人の席を飾る何物かを欲する様になる。更にそれが改良されると單色の絨氈となり又各種圖按の絨氈をも見るに至るわけである。

それ故世界で最も古い絨氈は文獻によれば今より三千五百年前の昔に溯る事が出来る。即ち埃及の名匠ベニハッサンの彫刻中に絨氈の製作に用ゐた圖按であると思はれるものがあり、即ち古代埃及人達は犠牲に供する牛を敷物の上に乗せ是れを神前にさゝげたと云ふ。其の敷物こそは全美をつくした絨氈に類するものであつたと云はれる。又希臘に於ては傳説時代の昔から既に絨氈を織る歌をホーマーの詩の中に發見する事が出来る。古代學の泰斗セイヌも云ふ様にバビロニヤでも豊かな織物を作製してゐた。即ちバビロニヤ人達は各種の模様ある織物を作つて、動物の形、人の肖像が織り出され壁にかけられる薄肉彫も是等の畫から考へ出されたのであつた。尙ほ羅馬時代では埃及女王クレオパトラがアントニウ

スと會談をする時、其のソフアーには妖麗な絨氈が掛けられてあつたと云ふ。

三

以上は文獻によつた古い絨氈の話であるが、今日現存する絨氈の最古のものは、最近ツルファン地方の發掘又はル・コック等の發掘によれば、紀元第五世紀乃至第九世紀頃のものが多く、是れが十字軍の結果多數西歐に流れ込んだと云はれてゐる。然し今日最も明確に確實な史料として遺るものは波斯ササン朝時代の國王コスロー一世(Khosrau I. 531-549)の冬の離宮クテスフォン(Otesphon)宮殿中にあつたものであらう。クテスフォンはチグリス、エウフラテス兩河が互に最も近く相接近する地方に於てチグリス河の東岸に建造された宮殿で、古代煉瓦で作られた其のドームの骨組みだけは今日でも見る事が出来る。バグダッドの東南々十六哩の地點にある所謂バルチア時代の廢墟の現存する土地である。此所で昔廣間にも居間にも多數の立派な絨氈を敷きつめてあつたものを、ササニヤン民族が第七世紀に於て攻め寄せて來た時、悉く或は持ち去られ、或は焼き拂はれた。そして當時持ち去られた品は片々になつて十字軍當時西歐に渡來した。然るに元來此の宮殿内の絨氈は小形のもの、綴り合せたものが多かつたので其の小形のを幾つか合せると當時の様子を明確に知る事が出来る様になつた。是れが現存する絨氈の最古のものであると云はれる。そしてそれ以前のものは恐らく極めて原始的なものであつた。

らうと云はれてゐる。其の以後に来るものはセルジューク・トルコ時代のものとなる。

それは現在ハンブルグ博物館にあるものでコニア産のものと思はれてゐるが、それは恐らく第十五世紀に西歐に齎され、文藝復古以後はテーブル掛けに使用されたものらしい。其の圖按は赤地と黄地よりなるもので、相當に白も多い。編方が著しく堅く爪さへ立たない位のものである。縦絲横絲共に羊毛で硬く角張つた蔓、力強い唐草模様、浮上つた黄色赤色が特色である。そして此の種のものに縁に古代トルコ文字を直線的に書いたものがある。

それより後れるものになると、文藝復古時代のものでペルシヤの職人を依頼してウシヤツクで製造したもの等もあるが、それは既に第十六世紀頃となるのである。トルコ絨氈としては相當に新しいが、然し中央アジヤ、ボハラ、ペルシヤ地方では後にも説く様に、未だ西歐の暗黒時代たる中世から曙光も見ず夜が明け放れない内から、既に立派な工藝品美術品としてペルシヤ絨氈、ボハラ絨氈等が各家庭に於て、又各宮殿に於て使用されるに至つた。事は中世の西歐と西亞との實相を物語る。

四

絨氈に関する文獻としては、今日現存する編纂物では一八七九年の編纂になるものもあるが、最も有名なのは一八九二年埃太利帝室博物館で蒐集したもので、其は原本が目下世界中に數冊しかないと云ふ。

然し英譯版は相當に多數存する。それは左の通りのものであつた。

1. *Oriental Carpets*, published by the Imp. Roy. Austrian Commercial Museum. Eng. ed. by C. P. Clarke. Vienna, 1892. 此の譯版は其の他
2. Lessing, Julius. *Ancient oriental carpet patterns*. London, 1879.
3. Robinson, Vincent. *Eastern carpets*. London, 1882.
4. Hendley, T. H. *Memorials of the Jeypore exhibition*. 4 Vols. London, 1883.
5. *Carpets*, concerning, Maple & Co. 8 Vols. London, 1884.
6. Coxon, Herbert. *Oriental carpets*. 8 Vols. London, 1884.
7. *Oriental Rugs, Designs for*. 4 Vols. Manchester, 1884.
8. Hendley, T. H. *Handbook of the Jeypore courts of the Ind. Col. Exhibition*. Calcutta, 1886.
9. Mukerji, T. N. *Art manufactures of India*. Calcutta, 1888.
10. Lievre, Ed. *Les arts decoratifs toutes les epoques*. Paris, 1890.
11. Ararat, *Oriental carpets and rugs*. London, 1891.
13. Griffiths, J. *Paintings in the Buddhist Caves of Ajanta*. 2. Vols. London, 1896.
14. Mumford, J. B. *Oriental rugs*. 8 Vols. New York, 1900.

15. Holt, Rosa Belle. Rugs, Oriental and occident I, antique and modern. Chicago, 1901.
16. Asian carpets XVI and XVII century designs from the Jaipur palaces. London, 1905.
17. Balfour, E. Encyclopaedia of India. 5 Vols.
18. Dresser, Charles. Carpets.
19. Oriental carpets. Instructions for Knittings. London.
20. Watt, Sir George. Indian art at Dehli. Calcutta.
21. Grote-Hasenbalg, Werner. Der Orientteppich, seine Geschichte und seine Kultur. 3 Bde. Berlin, 1922.

等である。其の内第十四のムムフォード氏の八巻物は米國出版であるがそれが高價な豪華版であるだけ参考にするによく、又第二十一のグローテ・ハーゼンバルグの三巻物は組織的に現に西歐の諸國の博物館又は有名な個人所有のものを説明し、其の圖按の數に於て敢て多いわけではないが、其の説明の用意周到且つ正確な點に於て多くの參考となるものである。勿論右の外其の參考書は無數にあるが大部なものとしては大體右の通りである。

五

絨氈製作の方法は木綿絲、毛絲又は絹絲を以て一時につき十二本乃至二十二本の割にして織機に縦絲を掛ける。そして是れに對し各種の色の毛絲を織み込んで行くのであるが、其の際機上に一の圖按を掛けて、それを見ながら織んで行く。其の圖按は織師自ら製作した場合もあるが、多くは各家庭に秘藏のもので、高價を支拂つて圖按家に考按してもらつたものである。丁度西歐や我が國に見る紋章の様なもので各家庭には各自獨特の圖按を所持するのである。これが西歐では文藝復興時代のチチアんだとかミケロアンゼロ乃至はルバン、レムブラン等が未だ一向に世に認められず、支那や日本で云へば唐とか平安朝時代の文學や美術がまだ完成されなかつた時代、既に中央アジアとか波斯乃至は小アジアの山中で今日でも吾等が自然に頭の下がる様な立派な美術品が貧弱な各家庭の家庭工業として斯うしたものを製作されてゐたのであるから、其の圖按に對しても如何に多くの注意が拂はれてゐたかは略々想像されるのである。

それだけ此の絨氈は普通の織物と較べると自ら異なる所がある。即ち其の手数だけでも、普通の織物では横絲一本を通して上から箆を以て簡單に是れを押へて行く。然し絨氈の場合には其の一度の箆を以て抑へる手数の代りに一時につき二十數回即ち一米突につき六百六十回以上も、普通絨氈の小形なものでも横一米突半はあるのであるから、横絲一本を通す代りに實に一千回以上の手数を掛けて織み込んでおくは是れを適當に切つて行くのである。殊に此の絨氈が結納の贈物でもある場合には、普通の織物に

於て一回の手數ですむ所を一千回も繰り返して戀人の名を唱へるわけであつて、此の贈物は新郎から贈られた結納金の半を其の儘に返す我が國現代の習慣等と較べると、其所に著しい精神的な差異を發見するわけである。

それ故織り込む毛絲でも色々の種類があり、生れて最初の年に刈り落した小羊の房毛を以て最上とし、其の小羊でもアンゴラ山羊とかモヘーヤ等と云ふ風に色々の種類がある。中には其の絨氈に自ら自分の髪の毛を抜いては織み込むものもあり、斯うする事は戀の成功を意味すると云はれてゐる。そして織み込んでゐる間に毛絲の房が二三本立つてゐる時は上吉で占の役をも務めるわけである。

然し絨氈を織み込んでゐる内に、必ずしも其の標本たる圖按の通りには出來ない。花の形がゆがんだのを見る事もあれば、蔓が向きを違へたりする場合もある。鑑定家は是れを以て織師の上手下手を判別するのであるが、織む人々の側から云へば「完全は神のみに期待される」と云つて餘り完全にすると神の領分を侵すと云ふが、それは丁度我が國でも、日光廟等で倒さ柱を見る様な、神に對する一種の敬虔な思想の存在を見る事が出来る。

斯様な風であるから、一枚の絨氈を織み終へるには最も急いでも、一米突半に二米突二十センチ位の普通小形のものでも、二人の婦人で二ヶ月はかゝる。そして丁寧なものになると二年乃至三年又は一生涯に只一枚を完成した等と云ふ例もある。それ故多くの絨氈の内には途中資本が盡きて毛絲を購入する

事が出来なくなつて數年其のまゝにして置いて、數年の後再び新毛絲を購入して織み込んだ爲めに、途中から毛絲の色の變つたものがある。是れは美術鑑賞の方面から云へばやゝ劣つた品として見らるべきであらうが、絨氈の場合は却つて是れを好む人さへある。それは織む人の精靈を思ひ浮べる縁にもなるからである。

六

絨氈は斯うした面倒な手數を経て始めて完成されるわけであるから、其の鑑別の方法は又簡單ではない。吾々は絨氈を鑑別するには、先づ第一に縦絲の數を計算する。それが十二三本から以下であれば、先づ臺所用かホテルの廊下用と見てよい。十二三本以上二十二三本までを普通絨氈と稱して、先づ來客のある座敷に敷ける種類に入れる。そしてそれ以上細かなものは壁掛けとか祈りの絨氈とか葬式の絨氈乃至は宮殿用又は寶物として尊重される。然し此の際注意しなければならぬのは、近年日本又は西歐に於て機械を以て多量生産を圖つたものがある。それは畫を見ると恰も普通の織物の様に細かに出来てゐる。そして被ひをした二枚重ねのものさへある。此種のもを吾々は織あんだものと云はずに織あつたものと云ふのである。此の種のもは一見圖按も甚だ立派であり、色の配合もよろしく、新しい内は手ざわりも甚だ結構であるけれども、是れは吾々は鑑賞用の絨氈の内には加へないのである。それは魂のない

ものである。工業價值から云つても既に其の價格は五分ノ一以下であるが、それは一兩年の使用の後色はあせ、形は壞れ、光澤はあせ、それにいやに部厚で、如何にも廢物となるのであるが、本物になると數十年の使用の後始めて光澤を發すると云はれる。そしてそれが靴で踏まれる程光澤を發し鮮明な色を出すのである。勿論本物でも汚はつくが、それは水と石鹼とブラシで洗濯する事が出来る。而も何等變色を見ない。

右に述べたのは絨氈を鑑定する際に於ける裏の目の細さを云つたのであるが、第二には其の色を調べ。六十年程前未だ化學染料たるアニリン染料が發見されなかつた時代のものは染料として植物性のもを使用した。其の色の識別は白布に水又はレモンの液をつけ又は他の酸類をつけて色の部を強く摩擦すると化學染料の際は色がつくけれども、植物性染料の場合は汚り以上色の落ちる事を見ない。近年の製作にかゝる新絨氈は大概アニリン染料を使用するので、賣物である場合は此の方法を試みる事を商人は大抵嫌ふのである。

眞正な植物性の染料を使用した場合は商人は卒先して其の方法を講ずるから、只其の事だけでも本物と偽作品との差異を判断する事が出来る。

第三に見られるのは其の毛の質であるが、毛の質は光澤及び手ざわりを以て識別される。光澤は縦に見、横に見、又上から下からと云ふ風に見る所によつて色々特種の光を發し、ランプの光、電氣の光、

日光等によつてもそれが色々に見へる。手ざわりでも本物には明かに上下の別があつて宛然猫や犬の背をなでた時の感じがする。然し機械織りの物は此の種の感じを與へない。

第四には絨氈其物の重さであるが、良質のもの程目がこんでゐるので、重く且つ堅い。徒らに部厚に出来てゐて、毛の長いのは普通の場合劣等品の證據となる。良質のものは重くして且つ薄く又堅い。中には爪も立たない程度のもがある。

第五、圖按の判定は最後に来る。凡そ回教美術の真髓は絨氈の圖按に現はれると云ふ程、此の圖按は絨氈鑑賞の基調となる。それ故各家庭では身分不相應に高價な圖按の爲めに支拂をなし、是れを以て其の家寶とする。此の圖按こそは容易に西歐の人々には諒解されないものであり、夜目遠目傘の内とか或は半身を掩ふ事によつて却て聯想的美觀を増すと云ふ様な、乃至は目をつぶつた眠り猫に云ふに云はれぬ靜的な活動性を聯想させる等棄て難き妙味を現はす。鑑賞家は先づ此圖按を凝視して是れを以て最後の判斷を下す。蓋し其の際幾何學的な對照等の正確さを眺めると共に見へざる作者自身と相談する事の出来るまで、即ち無我の三昧に入つて始めて其の絨氈の眞價を取り入れるまでに行くので、一枚の絨氈を眺めて煙草コーヒー等を喫しつゝ、實に半日乃至一日を暮す事さへある。それは丁度日本に於て刀劍の鑑定に又は高價な書畫の鑑定の際に見ると同様である。

以上は主として絨氈の鑑別の際に於ける注意事項について述べたのであるが、扱斯様な絨氈は何が故に珍重されるかに就て一寸敘述して見たい。絨氈は先づ第一に國際的價値を有するものであつて、決して一國一地方に限られた需用品ではない。それ故或る所有者の屬する一國がインフレーションの結果、其の貨幣價値が著しく下落した様な場合でも、其の絨氈の價値は何等變動を見ない。そして一國內で云へば貨幣價値の下落した場合は是れと反比例して高價なものとなる。それは丁度金塊とか又は金剛石其他の寶石に當るのである。それで絨氈は貯金の代用をなし、更に近東諸國の様にインフレーションの爲めに度々惱まされ銀行さへ正確に支拂をしない事の多い所では貯金以上に重法である。而も十年二十年の使用では變色せず、又すり切れもしないので永年の用に役立つ、且つ比較的小額でも購入出来るので小額貯金の代用を爲し又は運搬に便宜な財産ともなるわけである。

尙ほ絨氈の用途には第二に鑑賞用ともなる。即ちストーブの傍で硝子窓から差し込む太陽の光線に異様な光を發する古代絨氈を眺め、遠き昔の小アジャの山中に於ける製作者の魂を偲ぶ時、其所には藝術の極致をも見るのである。其の他絨氈は第三に結婚の持參品となり、第四に結婚の贈物となり、第五居室の敷物となるは勿論第六椅子掛けにもなれば第七壁掛けにもなる。或は第八夜具の下に敷かれては夜

具の用を辨じ、第九墓場に運ばれては葬式の際の棺箱の掩ひともなる。其の他第十には祭壇用にもなれば、第十一驥馬が荷物を運ぶ際に於ける兩掛けの袋ともなる。そして遂には第十二の祈禱用ともなるのである。等しく祈禱の際でも是れを地面か床の上に敷いて其の上で祈禱をする場合もあれば、又是れを壁間に掛けて禮拜の對象物の方角を示す事もある。

八

斯様に絨氈は近東地方又は歐米諸國の日常生活に不可分の日用品であるから、是れに關する物語、傳説文學等隨分澤山に發見する事が出来る。例へば絨氈の模様の一つに百合の花の形があつたと假定する。其の百合の花の來歴は昔一人の王子が非望を懷いて父王の位を奪はんと色々計劃する所があつた。然るに遂に其の謀りがもれて王子は父王の從者に追ひつめられた。王子は逃げ場を失つて遂に厩の中に飛び込んだ。然るに丁度其の厩にゐた乗馬は父王が何よりも可愛がつてゐた馬であつたので、其の名馬を傷付ける心配があるので遂に誰れも此の厩の内の王子に手向ふものがなかつた。それで父王も止むなく王子の罪を免して王子の厩から出るのを待つた。厩の中で助けられた王子は爾來其の馬に對し大に感謝する所があり馬の靴の形を畫がいては是れを飾つてゐた。然るに靴の形では面白くない所からそれが似てゐると云ふので百合の花の形にかへたと云ふのである。

斯様な一の圖按の中の一輪の花にでも盡きない傳統的な興味ある物語りを聞く。ましてや、一本の木でもそれは一の曼陀羅であると云ふ様に深遠な哲理を含める。即ち一本の木は一の世界を表現する。其の世界には根もあり幹もあり又枝もあり葉もある。枝には鳥が泣き葉には蟲が止まる。そして一本の木それ自身は社會の縮圖でもあると云ふ。

其他アラビアン・ナイトの中に現はれる絨氈の如きは飛行機ともなれば、人の精靈ともなるのである。

九

斯様な絨氈は其の賣買價值の高い事は勿論で、中には全然商品とはならないそれ以上のものさへある。今商品としての絨氈の價額を調べて見ると、製造された現場では米突カレー即ち一米突四方が單位となつて、安いのは二十金圓位から、高いのは米國の例では五萬弗を支拂つたものさへある。總じて日本では現場と較べると三倍の價額を持つ。それは中間商人の手數料及び運賃の外に輸入税として十割を課せられるからである。それ故普通座敷用として一米突半に二米突半位のもものは現場では七八十金圓から百五十金圓位で、それが日本へ輸入して二百五十金圓位から五百金圓内外、今の相場で云へば五百圓位から一千圓内外になる。そしてそれ以下の價のものは先づ歐洲製の化學染料による機械織りを見てよい。

勿論それは總じてペルシャ絨氈とかトルコ絨氈乃至アフガン、ボハラ又は支那絨氈等と云ふもので、其の外の宮殿にあつたものとか極古いもの等になると前言せる様に千金萬金を拂つても中々に手に入らぬのである。右の内最も高價なのはペルシャ品で、トルコ、ボハラ是れに次ぎ、アフガンは餘程安くなる。そして支那絨氈はそれよりも安價である。それは一つには運賃にもよるのであるが、距離の近い支那のものが本邦に多く這入るのは當然であらう。是れと較べてペルシャ品は總じて顧客の目の肥えてゐない日本では、多くの需用がないのは當然であらう。然し外交團等には中々に目きゝがるのであるから、時には山海の珍味よりも一枚のペルシャ絨氈を見る事を以て多大の満足を與へられる事さへある。

ましてや歴史付きの絨氈になると、最近の例でも、例へば一九一〇年紐育で一米突四方十二萬弗で賣れたものもあり、又同年三十五萬弗で賣れたものもあつた。そして今日でも古いペルシャ物になると米國の價では先づ米突カレーで五千弗から五萬弗位が普通であると云はれてゐる。

斯様な高價なものは日本の百貨店等に賣つてゐる米突カレー二圓か三圓の品とどんなに違ふかと云ふに、それは問題にならない。

即ち近東地方の古い絨氈は功利的な考で作られたのではない。一針縫つては戀人の名を呼び、又一針縫つては神に祈りをさゝげる。一寸を縫ひ上げる爲めには一米突半の巾のものとしても實に二萬數千回其の戀人の名を又は神に對する祈りをさゝげて出來上つたものである。工業價値としては知らないが、

靈魂の所有者たる人間が丹念に作り上げた品、而もそれに靈的で誤魔化しのない眞面目さを見る時、吾等は丁度中尊寺や其の他の博物館等で金泥の寫經等を見る様な氣分で、自然其の壯嚴さに頭の下がるのを覚えるのである。其所には金錢を以て評價する事の出来ない貴い或物を發見するのである。即ち絨氈はよき意味の藝術的作品であるのである。

一〇

次ぎには絨氈の種類について述べると、第一其の大きさは用ゐる室によつて異なるが、廊下用は一米突位の中で長さには限りはない。回教寺院用としては普通小形のもを幾つも綴り合せて使用する。小形のものとは普通出來あいのものを云ふので、巾一米突半位、長さ二米突半位で此の形のもは、各家庭にも多く使用され、是れを幾枚も多少曲げて傾けて敷く事が流行する。勿論宮殿とか正式なクラブの廣間の様な所には丁度それだけの大きさに注文したものを使用する事が正しいわけである。

祈禱用の絨氈は縦よりも横の方が廣く四人乃至五人の兄弟又は家族が並んで祈禱する用に供するものもある。勿論普通の祈禱用絨氈は日本の疊の大きさと比べて巾は同じ位で少し長さに於て短い位のものである。

尙ほ又絨氈の種類を其の原産地の名によつて呼ぶのが普通である。例へば(1)トルキスタン(2)ポ

ハラ(3)アフガニスタン(4)ホラツサン(5)カシヤン(6)サルック(7)ケルマン(8)テヘラーン(9)イスバハン(10)シラーズ(11)タブリーズ(12)ケルマンシャー(13)カヴカス(14)ダマスクス(15)ウシヤク(16)サライ(17)チーン(18)シラクサ(19)ウシヤック(20)コニヤ等で其の他にも無數にあるが何れも地名から來るのである。只だ其の中(16)サライと云ふのは宮殿付きの工場で作つたものと云ふ意味で、宮殿と呼んでゐる。是れ位が工場名で他は(17)チーン等も支那と云ふ意味である。

そして以上は何れも各々特異性を有し、圖按でも色合でも形でも各郷土の地方色を持つ。例へばペルシヤの様な異教派の回教徒の多い地方では動物の形とか人の肖像まで編み込む事がある。然しトルコの様には正統派の回教に屬する人の多い地方では一切斯様なものを見る事が出来ない。只植物系統のもの、み例へば唐草模様とか、文字の變形、花の形等を用ゐるのみである。それは回教は偶像崇拜反對の聲の盛んな時代に出來たからであつた。

尙は又色などでも地方によつて各々特色を示す。例へばトルコ及びアフガン乃至トルキスタン、ボハラの如きでは何れも赤色が基調となつてゐる。其の赤色は喜びを現はすものであると云ひ、其の染料は中央アジヤ産の茜アカネ又は樅木に住むコチニールと呼ぶ小蟲を捕へて是れを殺して取るので、其の一封度を作するためには實に此の蟲五萬疋を要すると云はれてゐる。

又ペルシヤでは空氣の表象であると云はれる青を好む。青は蒙古では勇氣を示すとも云ふ。そして等

しくペルシャでは緑を不朽の表象として主として神聖な祈禱用の絨氈に使用する。其の他支那では高貴の色として多く黄色を好み紫は各地に於て何れも尊嚴又は嚴肅を意味する。アラビヤ地方では黒色のものもあるがそれは謹嚴の標であり、ペルシャ地方に多い橙色は恭敬、従順の意を表はす、トルコ系統に赤の外白も相當にある。例へばボハラボハラの如きアフガニスタンの如きは何れも赤と白のみであるが白は思想の潔白又は單純を表はす。是等の内で黄色はサフランから、緑は胡桃の實から又は黄色に染めて然る後藍で染める場合もある。灰色は五倍子から、紫は海中の軟體動物チリヤから、其の他藍色は所謂藍から、そして黒色は鐵粉から又は自然の黒色羊毛から取る事もあるが、それは早く解けると云ふので多くは染める事が習慣となつてゐる。

絨氈には以上述べた様に、各地方名による種類がある様に各地方の地方色をも示すのであるが、又其の製作方法賣出し方法、運搬方法等も多少づゝ異つてゐる。

一一

トルコではペルシャも同様であるが、其の總輸出額の約一割即ち英貨百五十萬磅が絨氈の輸出年額に當る。其れは主として英米の二國へ賣り出され、此の二國のみで既に百二十萬英貨磅に達する。そして其の他は佛伊獨の順序で各國へ賣れて行く。トルコでは此の絨氈製造業は大部分家庭工業で、大戰前に

はトルコに三千五百の絨氈工場があつたと云はれるが、今日では其の領土も著しく縮少されたので、一萬英貨磅以上の資本を有する工場は十數個所を以て數へられ、ペルシャでは僅かに五箇所に過ぎない。そしてトルコから希土戦争後絨氈熟練職工の多いギリシヤ人とか又はアルメニヤ人は合計約三百萬人も國外に追放され又は亡命し、彼等は或は巴里で又紐育で各々絨氈業に従事してゐる。右様の次第でトルコ本國では精巧なものを作る熟練労働者が一時著しく減じたので、其の製造業も一時下火となつた。然し總じて大戦前の約六割は復活したと云はれてゐる。

近東地方で最も安價な絨氈を産するのはスミルナであるが、今日ではスミルナの工場では只だ修繕をするのみで、其附近の地方クタヒヤ、アイディン又はスバルタの様な地方からの家庭工業品として製作されたものを仕上げなどしてゐるのみである。昔は和蘭人が此の地へ資本を下し其の産出品を遠く東洋の日本支那にまで賣りさばいた。即ち工場では附近の農民へ毛絲其の他の材料を供給し出來上つた品を買ひ取るのであるが、此の地方では住民の約三分一が此の手工業に従事する。

又此の近東地方で最も優等品を生産するホラツサンやボハラの地方では矢張り別に工場で作るのではなく各家庭に於て手工業として製作するのである。是等の地方では中世其の儘の姿で極めて保守的に昔のまゝの形で、其の生業を續ける。只だ距離が著しく遠いので運搬に多くの費用を要し、随つて高價なものとなる事は蓋し止むを得ざる事である。是等ホラツサン又は中央アジヤの品々は驥馬の脊をかりて

メシエットからテヘラーン、そしてタブリーズに出でトレビゾンド經由黒海岸に出で遂にスタンブールの税關倉庫に這入る。此所からスミルナへ向くものもあるがペルシヤ品や中央アジヤ品及びカブカス品はペルシヤ灣頭ブシールにも出るが多くはスミルナ又はスタンブールに於て其の商人に賣りさばかれる。又近東地方にも安價なもの、需用があるので西歐の機械織りの品が、進出してゐるのを見る。

一二

吾人は今トルコ絨氈を説明して遂に終りに到達した。顧みてトルコ絨氈の特色を吟味すると、其の圖按が直線的で唐草模様を畫くにも蔓のない花だけであつたり、又は花も角張つたものが多い。そして色も赤とか白と云ふ風に原色的なものが多く、中間色とか乃至はぼかしの様なものは絶えて見られない。更に其の宗派から來るのでもあらうが、圖按に植物性のももの又は無生物のみで動物とか人物と云ふ様な偶像は在來は絶對に見られなかつた。農民の家庭工業を主とするので保守的で變化なく其の國民性をよく表現すると考へる。然るに此のトルコ民族が二十世紀の第二十年以來最近十數年間に於て著しい大改革を斷行した。帝政を廢し、文字を更へ、風俗を改め、制度を更新し、經濟關係を變じて民族を純化した。是れは一見保守的な國民性と矛盾する様に考へる向きもあるが、實は左に非ず、彼等の中間的で灰色なものを好まざる國民性から來るのであると考へる。

是れと比べてペルシヤの場合は將に反對である。即ちペルシヤでは第七世紀以來回教異教派を信奉し、回教民族中でのデカーダン派に屬する。それ故必ずしも回教正統派的でなく、絨氈の圖按にでも、動物は勿論外くの人物を畫き灰色とか橙色と云ふ様な中間色も多く使用され、ぼかしもあれば、總べてが曲線的である。且つ畫柄も所謂デカダーン派に屬するは勿論である。随つて彼等は神前に於て回教正統派の禁ずる音樂を奏し經典中にでも多數の挿繪を挿入する。

即ちペルシヤの歴史それ自身が丁度それを物語る。文字を變へた事も二回もあつたがそれは征服されたからであつた。然し其の文化の内容は決して更へなかつた。

一九二三年共和運動の惹起された時も、王政の變革を好まない多數の僧侶議員の主張によつてカヂャール王朝に代ふるにパーラビー王朝を以てシリザ・カーンを遂にリザシャールとするに至つた。即ちペルシヤでは其の國民性の然らしめる所でもあらうが赤化運動も其の效なく議會はあつても其の議員の大多數は僧侶で其の制度其他の變遷が極めて曲線的であつて決して直線的ではない。即ちペルシヤ人は近代的な風俗を真似る中世時代の人々であると云はれる程、今日でも急激な變化を好まない國柄の人々であると思へる。

そして我が國民性を見ると何れかと云へばトルコよりは寧ろペルシヤのそれによく似通つてゐる様と思ふ。歴史上に幾多の變遷はあつても著しい變革がなかつた。國民は中間色を好み、強いカーブを欲し

ない。直線的なものを嫌つて曲線的なものを好む。それは丁度トルコの國民性及び其の歴史よりは寧ろペルシャの國民性及び其の歴史によく似通つてゐると考へる。古代希臘人が東方古代文明を希臘化して西歐に傳へた様に世界各種の文明を日本化して後世によく傳へるものは日本ではあるまいか。